

12月の発生予報および防除上の注意事項

沖縄群島

1 マンゴー

花芽分化期～出蕾期における病害虫の防除対策

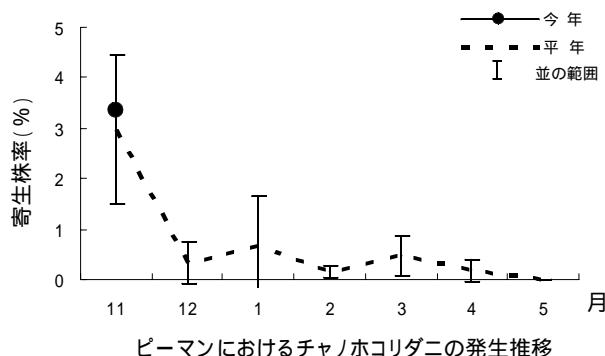
- 11月中旬の調査の結果、一部の施設でマンゴーキジラミやマンゴーハフクレタマバエ、チャノキイロアザミウマの被害がみられた。
- 現在発生している不要な新梢は、害虫の発生源となるため、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分する。
- 今後、炭疽病の発生が多くなるので、罹病した葉や枝は速やかにビニールに入れるなどして施設外に持ち出し処分するとともに、予防防除を行う。

2 ピーマン

(1)チャノホコリダニ

発生程度：並
予報の根拠

11月下旬の調査の結果、寄生株率は3.3%(前年0%、平年3.0%)と平年並であった。



ピーマンにおけるチャノホコリダニの発生推移

防除上注意すべき事項

- 摘葉等の残渣は、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
- 繁殖が早く、多発すると防除が困難になるので早期発見・早期防除に努める。
- 生長点付近の葉の隙間や果実のへたなど薬剤がかかりにくい場所に寄生するので、散布むらのないよう丁寧に散布し、同系統薬剤の連用は避ける。

3 さやいんげん(平張り)

タバココナジラミの防除対策

- 11月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.1頭(前年0.1頭、平年0.5頭)と平年よりやや少なかった。
- 本種はさやの白化を引き起こすので、出入口の防虫ネットは二重にするなどして、施設内への飛来侵入を防止する。
- 摘葉等による残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋等に入れ圃場外へ持ち出し処分する。
- 黄色粘着板等により、早期発見・早期防除に努める。
- 発生源となる周辺雑草の除去に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

ハモグリバエ類の防除対策

- a 11月下旬の調査の結果、寄生株率は20.0% (前年38.0%、平年54.1%)と平年よりやや少なく、寄生葉率も2.0%(前年7.0%、平年16.9%)と平年よりやや少なかった。
- b 出入口の防虫ネットは二重にするなどして施設内への飛来侵入を防止する。
- c 摘葉等による残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋等に入れ圃場外へ持ち出し処分する。
- d 黄色粘着板等により、早期発見・早期防除に努める。
- e 土着天敵による防除効果も期待できるので、薬剤防除を行う際は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。

4 小ギク(年末出荷用)

アザミウマ類の防除対策

- a 11月の調査の結果、アザミウマ類による葉の被害がみられ、被害圃場率は68.2%(前月62.2%)、被害茎率は23.1%(前月21.5%)で、前月よりも被害が増加している。
- b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- c 虫見板等により早期発見し、早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので同系統薬剤の連用を避ける。

アブラムシ類の防除対策

- a 11月の調査の結果、アブラムシ類による葉および蕾への寄生がみられ、発生圃場率は22.7%(前月15.2%)、寄生茎率は8.4%(前月5.7%)で、前月よりも増加している。
- b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- c 薬剤は蕾や葉裏に十分かかるように散布する。
- d 発生初期の防除を徹底し、同系統薬剤の連用を避ける。

ハダニ類の防除対策

- a 11月の調査の結果、ハダニ類の葉への寄生がみられ、発生圃場率は20.5%、寄生茎率は6.6%であった。
- b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- c 多発すると防除が困難になるので早期発見・早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので同系統薬剤の連用を避ける。